The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自然談話における引用発話の形式 ： 日本語とインドネシア語の対照研究
Author(s)	Ginanjar, Pika Yestia
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　（　　ピカ　イェスティア　ギナンジャル　　）	
論文題名	自然談話における引用発話の形式 ―日本語とインドネシア語の対照研究―

論文内容の要旨

引用とは、所与と見なされる言葉を実物提示の形で発話の場に再現することである（加藤、2010）。つまり、話し手がどこかに、既に、存在していると見なしたことばを再現するということと述べられている。

日本語では、これまで引用について数多くの研究がなされてきた。しかし、自然談話を対象とする引用研究はまだ十分とは言えない。一方、インドネシア語については引用の研究はおろか、自然談話を対象とした研究も筆者は寡聞にして知らない。

そこで、本研究は、日本語とインドネシア語、の自然談話における引用を明らかにすることを試みる。

本研究の目的は、実際に引用はどのように行われているのかを明らかにすることである。自然会話における引用マーカーの使用について考察をする。引用発話とプロソディの関係を検証することである。そのため、本研究は自然会話を対象とし、母語話者による会話を録音したデータを文字化し、考察を行った。

分析に当たって、まずは、引用発話の出現数および用いられている引用マーカーを調べた。日本語のデータにおいて、引用発話は707ヵ所が確認された。その内訳は、282発話は「と/て＋思う系」でマークされ、153発話は「と/て言う系」、105発話「みたいな」、103発話「って」、55発話「とか」、そして、9発話はその他のマーカーが用いられている。

一方、インドネシア語のデータにおいては、引用発話は449ヵ所が確認されたなか、最も多く用いられている形式はバーバルマーカー無し（‘free-standing quotation’）は220発話である。他は、‘gitu’（150ヵ所）、‘*cenah*’（24ヵ所）、‘bilang’（17ヵ所）、‘kata’（16か所、‘ngomong’（6ヵ所）、‘*ceuk*’（5ヵ所）、‘pikir’（4ヵ所）、‘cerita’（3ヵ所）、‘nanya’（2ヵ所）、‘*asa*’（2ヵ所）である。

それにより、日本語においては、「思考」引用は707発話中282発話が確認されており、最も多く引用されているといえるだろう。一方、インドネシア語においては、「思考」引用のマーカーは449発話中、4発話（`pikir`）のみである。これは、インドネシア語においては「思考」引用は少ないという意味ではなく、インドネシア語における「思考」引用は“free”の形式を用いられているからだと考えられる。すなわち、引用行為自体は行われているが、バーバルマーカーが用いられていないだけだと言えよう。

次に、出現した引用発話を’narrative context’ 及び ‘non-narrative context’によって考察を行った。

Narrative contextにおいて確認された引用発話は、話し手が過去の出来事を語る時に用いられている場面が多い。そのため、語りの場面では、引用発話が多く用いられているのも当然と言える。

Haakana (2007)によれば、引用発話はcomplaint stories（文句・苦情の語り）において多く用いられている。また、本研究にも‘complaint stories’（文句・苦情の語り）の場面に引用発話が多く用いられていることが分かる。

Complaint storiesは従来の日本語の引用研究ではあまり扱われていないため、本研究で取り上げたいと考える。語り手はcomplaint storiesにおいて引用発話は証拠として提示されている（Holt,2007）。本研究では‘complaint stories’（文句・苦情の語り）を含むマイナス心情が表出するストーリーの場面に日本語の場合は124ヵ所、インドネシア語の場合は226ヵ所の引用発話が用いられていることが確認されている。

Non-narrative contextに関しては、本研究は引用発話の使用を現象として取り上げ、日本語とインドネシア語を対照した。確認された用法は以下のようなである。

1).　解釈を引用する。話者が（状況の）解釈したことを引用発話として表示する。

2).　自分が発話したことばに対して、指摘・問題化する。その直後に「突っ込み」もしくは自己修正が伴う場合が多

い。

3). 「情報が足りない」話し手自身が自分の発話が、不明であると気づき、その直後の発話が情報を明確にするというような用法である。

4). 主張を強調する。

5). 相手の発話を指摘・問題視する。

6). 「フィクション」引用[1]。

最後に、本研究は引用発話とプロソディの関係を検証した。先行研究では、プロソディと引用の関係については、引用発話は、高いピッチで開始する場合もあるが、必ずしもそうとは限らない。また、引用発話は、大きい声で発話する場合もあるが、必ずしもそうとは限らない（Klewitz&Couper-Kuhlen,1999; Bolden,2004）と述べられている。

本研究では、ピッチのシフト及びテンポの変化に注目する。談話において、地の発話のピッチレジスターと引用発話のピッチレジスターの差を分析した。テンポも同様な考察を行った。

日本語とインドネシア語、いずれの言語における引用発話はプロソディの使用が伴うことが確認された。日本語では、バーバルマーカーの使用が主要であると言える。一方インドネシア語では、バーバルマーカーの使用が主要ではないため、プロソディ的なマーカーが必須になると言えよう。

日本語とインドネシア語との会話において、話し手は、プロソディを用い、引用をマークすることを示す。本研究で扱ったプロソディはピッチ及びテンポに限られているため、会話における引用とプロソディの関係についてはさらなる検証が必要であると考えられる。

本研究は、両言語における今後の引用研究、対照研究、自然談話を扱う研究に対し手がかりとして示唆を与えるものと考える。

[1] メイナード（1997:157）は、想定引用と提唱し、想定引用は明らかに発言していないコンテクストで、誰かが発言したかのようにその人に代わって引用表現で言語化するときの引用（もどきの引用）と述べた。また、藤田（2000:17）は、推量・想像というものの引用を記述し、フィクションは事実を前提とするものであって、その逆ではないのだから、事実世界において所与のコトバを引いてくると指摘した。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ Pika Yestia Ginanjar ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	岩井　康雄
	副 査　教 授	筒井　佐代
	副 査　教 授	今井　忍
	副 査　教 授	岸田　泰浩
	副 査　准教授	原　真由子

論文審査の結果の要旨

本論文は、自然談話における「引用」について、日本語とインドネシア語を対照し、それぞれの実態を捉えることを目的としている。

日本語においては多くの「引用」研究が行われているが、自然談話を対象とする研究は少なく、インドネシア語においては、自然談話を対象とした研究はおろか、「引用」研究自体が、まだほとんど行われていない状況である。

本論文では、日本語の自然会話総計473分、インドネシア語の自然会話総計350分の録音データを対象とし、「引用」箇所の認定、引用マーカーの種類と数、プロソディの特徴を検証している。

引用発話の出現は、日本語会話では707カ所、インドネシア語では449カ所が確認された。また、用いられている引用マーカーは、日本語では「と／て＋思う系」が282発話、「と／て＋言う系」が153発話と上位を占める一方で、インドネシア語では'free-standing quotation'すなわち「バーバルマーカー」を持たない引用が220発話を占めており、日本語とは大きく異なっていることが確認された。また、引用発話の出現を'narrative context'と'non-narrative context'に分けて観察すると、narrative contextにおいては、日本語、インドネシア語ともに「文句・苦情の語り」において、多く用いられており、non-narrative contextでは、様々な用法で現れることが示された。

さらに、引用発話とプロソディについては、ピッチとテンポを観察しているが、引用部分に何らかの特定プロソディの使用が伴う可能性が示されている。

本論文は、説明力や実証性など多くの点で不十分さを指摘せざるを得ない点はあるが、自然談話における引用研究が未だ緒に就いたばかりである現状、多くの先行研究が、例えば談話におけるプロソディ研究などでは、ごく少数の発話を対象とする、必ずしも「自然」とは言えない状況での発話を対象とするなどの問題を持っていることなどを考えると、この論文はパイオニアとしての価値をこそ、評価すべきものと考えられる。

更に、日本語と引用の形式が異なるインドネシア語を対照することで、バーバルマーカーの使用とプロソディ要素の在り方についても、検討の可能性を広げる基礎を提供する論考になっていると評価することが出来る。

以上により、本審査委員会は、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位論文と認められるものとして、全員一致で合格と判断した。